

コンサルテーション事業報告

事業名 重複障害児・者コミュニケーション支援

事業代表者 川住 隆一 (人間発達臨床科学講座)

対 象 重複障害児・者、重複障害児・者の家族、重複障害児・者が在籍する学校の教師、関係機関職員

目 的 重複障害児・者と周囲の者とのコミュニケーションが成立・展開することを目標として、各々の生活の場や活動の場におけるコミュニケーションの機会と方法の開発を行うことを目的とする。また、このための周囲の在り方について、保護者や教員、福祉・療育機関職員とともに探っていく。

主なスタッフ 川住隆一および川住研究室指導学生

東北大学大学院教育学研究科：野崎義和・永瀬 開・松崎 泰・南島 開・
小野健太・菅原愛理・広木 純・鍋倉康平
東北大学教育学部：宮本 渚・太田 光

実施内容

(1) 教育・養育相談として対応している事例（7事例）

7事例は、重複障害を有している青年あるいは児童である。各々月に1度位の割合で保護者と共に来談しており、研究室やプレイルーム等でスタッフが分担して対応している。全員がコミュニケーションの発信・受信手段やコミュニケーション内容の拡がり为目标であるが、その他に、楽器や玩具の操作行動、絵画の表現行動、スイッチの操作行動、全身性の運動活動の広がりも大きな課題である。

今年度、この内の1事例については、宮本が、障害特性に配慮しつつ、音楽を利用した相互交渉場面における対象児とかかわり手の行動について詳細なビデオ分析を行い卒業研究としてまとめている。また、川住、野崎、南島が1事例について言語的働きかけ（母親による語りかけ）の取り組み経過をまとめ、その意義について検討し、本教育ネットワークセンター年報に事例報告を行っている。また、1事例については、昨年度に引き続き訪問看護ステーションに所属する作業療法士と連携して、家庭におけるコミュニケーションの促進やコミュニケーションエイドの利用について取り組んだ。

(2) 病院・施設に長期入院中の事例（1事例）

国立病院重症心身障害児・者病棟に入院していて、重度肢体不自由のため発信手段に大きな制約はあるものの言葉の理解力が比較的高い成人1名について、野崎が、昨年度に続いて2～3ヶ月に1度の割合で会話によるコミュニケーション意欲の促進とパソコン操作による文字でのコミュニケーション支援を実施している。前者において、野崎は音声言語と身振りを動作を使用し、対象者は、表情・視線の変化、発声、手指・首・口・舌による身振り動作を使用している。会話の内容は、病棟生活での出来事、体調、趣味（音楽鑑賞）などに関することであった。

(3) 支援学校教師やNPO法人職員との連携

代表者は、宮城県立支援学校小学部1～2年生の重複障害児学級担任の教師と連携し、在籍児童のコミュニケーション行動を拓げる糸口を探し出すとともにAAC・支援器機使用の方略について検討してきた。今年度は特に、人やものへの自発的な動きが少なく介入の手がかりが見えにくい児童や多動気味で物への関心が乏しい児童への対応について検討してきた（学期に1度の割合）。また、宮城県の高等専門学校教員、支援学校教員、NPO法人職員等とともに障害者のコミュニケーション支援とコミュニケーション代替手段の開発・活用を目的とした研究会「楽暮プロジェクト」の活動に取り組んできた（毎月1回）。

(4) 研究発表等

川住隆一・南島 開・野崎義和（2015）重度・重複障害児のコミュニケーション行動の形成に関する研究—言語的働きかけに対する応答行動の発現経過—．東北大学大学院教育学研究科教育ネットワークセンター年報，第15号， - ．

宮本 渚（2015）アンジェルマン症候群者における易興奮性の抑制条件と対人関係の広がりに関する研究—音楽の導入を通して—．平成26年度（2014年度）東北大学教育学部卒業論文．